

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：17401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13565

研究課題名（和文）先史時代におけるマリアナ諸島の貝類利用の考古学的研究

研究課題名（英文）Archaeological Study of Using Shellfish in Prehistoric Mariana Islands

研究代表者

山野 ケン陽次郎 (Yamano, Kenyojiro)

熊本大学・埋蔵文化財調査センター・助教

研究者番号：10711997

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：太平洋西部島嶼地域の人類拡散や先史文化の境界線を物質文化により新たな視点で捉えることを目的とした。研究期間中の目的は先史時代のマリアナ諸島の貝製品の変遷図を提示し、その背景について考察することである。研究の結果、マリアナ諸島において貝製品出土遺跡を39カ所集成した。これらの遺跡と遺物を対象とし、分類した貝製実用品や貝製装飾品の時期的傾向を捉えた。その結果、Ⅰ期（1500-1000BC）とⅤ期（AD1000-1521）を画期に貝製品組成の出現と変化が生じていることが確認できた。こうした変化には当該時期における人類移動や交流・交易活動が関連している可能性が高い。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで考古学において、オセアニアの人類拡散や文化伝播に関する分析は、土器や石器が主流であった。貝製品はオセアニアでは広く一般的な物質文化であるが、先行研究では一部の例を除き総合的な研究が実施されていない。本研究でマリアナ諸島の貝製品を網羅的に集成し、その組成の変化を明確にしたことで、他地域との比較分析を実施することが可能となった。今後、ミクロネシアやフィリピンなど東南アジア島嶼部で同様の研究を継続していくことにより、太平洋西部島嶼地域における人種拡散や文化伝播、交流・交易などをより具体的に描くことができるようになると想定される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this project is to provide a new perspective on human diffusion and prehistoric cultural boundaries in the western Pacific island region through material culture. The objective of the study was to present a transitional figure of prehistoric Mariana Islands shell artifacts and to discuss the background of this transition. As a result of this research, 39 excavation sites were identified in the Mariana Islands. The results of this study indicated that the shell artifacts and artifacts from sites in the Mariana Islands were collected and categorized to identify the chronological trends of shell tools and ornaments. The results indicated that the composition of shell artifacts changed during two distinct periods: Phase I (1500-1000BC) and Phase V (AD1000-1521). These changes are likely to be related to human migrations, exchanges, and trade activities during these periods.

研究分野：考古学

キーワード：先史時代 マリアナ諸島 貝製品 製作技術 交流・交易 人類拡散 ミクロネシア オセアニア

1. 研究開始当初の背景

マリアナ諸島はフィリピン海の東側に位置する長さ約 800 kmにおよぶ弧状列島である。マリアナ諸島の先史時代は、物質文化の内容の相違から紀元前約 1500 から紀元後約 1000 年の先ラッテ期と、紀元後約 1000 年からマゼラン一行がグアム島に上陸した紀元後 1521 年までのラッテ期に大きく区分されている。

マリアナ諸島の考古学は、初期ではとくにラッテストーン(図1)と呼ばれる独自の石柱遺構を中心とした研究と、これを有するチャモロの様々な物質文化の復元に力が注がれた。1957年のスポアーによる研究以降には、約 3500 年前にマリアナ諸島に入植した人類とその文化の存在が明らかとなり、先ラッテ期とラッテ期の2時期区分が提唱され注目が集まった(文献



図1 復元されたラッテストーン

) 以後、調査の累積を受け、ラッテ遺跡の集落構造の解明、土器編年の充実、自然遺体も含めた各種遺物の変遷など、あらゆる側面の調査研究が進み、マリアナ諸島の先史時代の概要が一般にも周知されるようになってきた。近年では、オセアニアにおける人類拡散がより具体的に復元されていく中で、先ラッテ期およびラッテ期における人類移動と起源、その文化内容の変動に関する研究が盛んとなり、考古学だけでなく歴史学や遺伝学、言語学、海洋環境学などの総合的研究の進展、深化がみられる段階にある。



図2 グアム島ナトンビーチ遺跡出土貝製品

こうした中、改めて注目すべき遺物が貝製品である(図2)。貝殻で作られた実用品、装飾品の組成に関する研究はマリアナ諸島の起源地の推定や他の島との関係性を認識する上で古くから注目されてきた(文献 ~)。しかし、その出土資料数の増加に対し、基礎資料の整理が追いついていない状況にあった。各島嶼地域における基礎資料の提示による比較研究の連鎖は、先史時代における人類移動と文化传播を新たな視点で復元することに繋がる。研究代表者の山野は2010年にグアム島ハプト遺跡の発掘調査に参加し、ラッテストーン周辺から採集、出土した貝製品についての報告を行なった(文献)。また、2015~2019年度にかけて科学研究費の採択を受け、マリアナ諸島の貝製品の集成や実測作業を実施してきた。

2. 研究の目的

本研究は、先史時代における太平洋西部島嶼地域の「貝類利用」の内容やその変化を明らかにし、地域における比較検討を行ない、各地域の独自性と共通性を明確にすることで「島嶼地域」における人類移動と拡散を復元し、先史文化の境界を物質文化から新たな視点で捉えることを最終的な目的とする。その最初の作業として、本科研ではミクロネシアにおいて比較的資料の充実しているマリアナ諸島における先史時代の貝製品を対象とし、資料集成や実測図作成、写真撮影を実施することで、基礎資料を作成し、分類した貝製品を個別に分析する。こうして当該地域の貝製品組成を明らかにしたうえで貝製品の時期的変遷図を提示することを第一の目的とした。また、本質的には マリアナ諸島における初期人類の入植と起源地、先ラッテ期と後続するラッテ期の物質文化の内容の相違と変化、ラッテ期における人類の再入植の3つの問題点の解明に向けて分析を進めた。

3. 研究の方法

(1) 研究の方法

本研究ではマリアナ諸島を対象地域とし、このうち最も発掘調査事例が多く、資料へアプローチが可能なグアム島を主たる調査地域とした。本研究の研究方法は3つの段階に分かれる。すなわち 発掘調査報告書など文献収集による貝製品の集成作業、貝製品の記録作業、貝製品の分析である。このうち集成作業において報告書の集成は現地の考古学者および日本のミクロネシア研究者からの報告書および報告書リポジトリの提供、図書館や研究機関での閲覧や、インターネット上でのリポジトリデータの検索による。記録作業においては実測図の作成と写真撮影を実施した。当該地域において貝製品に関しては、文章あるいは遺物一覧表で一括して報告され

ることが多く、実測図面は資料数が多いほど全資料が掲載されることが少ない傾向にある。遺物実測図は認識図ではあるが、製作技法や使用される貝種の形態など、必要な情報を取り上げて図化することで、写真では示せない情報を数多く提示することが可能である。分析では、集成した貝製品について先行研究を参考にしつつ、機能、形態から大分類を設けた。各分類についてさらに、貝種、形態、加工状況などから小分類を設け、マリアナ諸島における貝製品の分類表を作成した。各貝製品の時期的、分布的傾向を読み取り、分類した貝製品の個別的研究を実施した。これらの分析結果を総括し、マリアナ諸島の貝製品の変遷図を作成し、考察に繋げた。

(2) 時期区分

遺物の時期は遺跡、遺構、文化層における炭素年代と共伴する土器の年代を用いて設定した。土器の年代観は Moore(文献⑨)の土器編年観に従った(図3)。時期区分は Ⅰ期：先ラッテ期早期(BC1500 - 1000年)、Ⅱ期：先ラッテ期前期(BC1000 - 500年)、Ⅲ期：先ラッテ期中期(BC500 - AD400年)、Ⅳ期：先ラッテ期後期(AD400 - 1000年)、Ⅴ期：ラッテ期(AD1000 - 1521年)、Ⅵ期：歴史時代(前期AD1521 - 1700年、後期AD1700 - 1945年)とした。

(3) 貝製品の分類

貝製品のうち実用品は、貝製斧・貝製鑿、貝製ナイフ・貝製スクレーパー、貝製単式釣針、貝製組合せ式釣針、貝製錘、貝製容器に分類した。貝製装飾品は、貝製ビーズ、貝製ディスク、貝製垂飾、貝製リングに分類した。

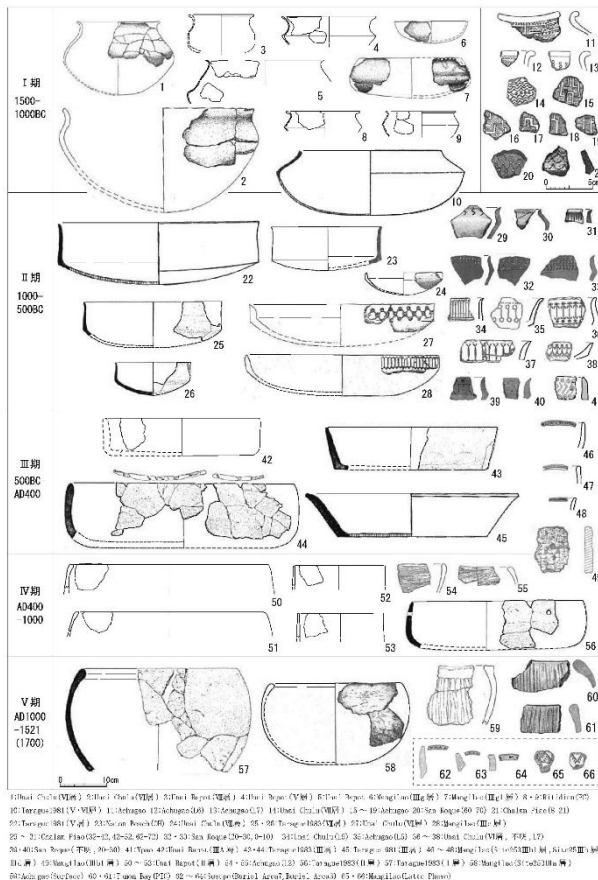
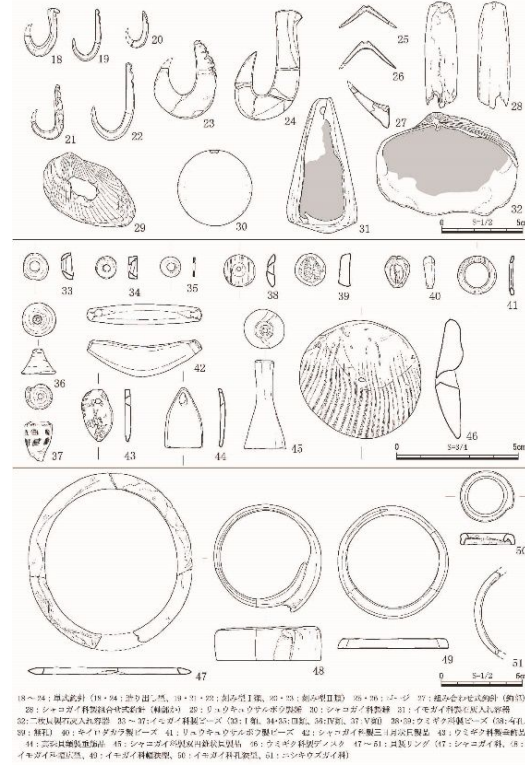


図3 マリアナ諸島の土器編年図
(文献⑨より、Moore1983 他を参考に作成)



1〜7: ショウゴイ製針類 (左: 複線彫刻型、1〜3: 単線彫刻型、6・7: 糸彫刻型) 8: ショウゴイ製貝 9: ショウゴイ製貝 10: ショウゴイ製貝 11: ショウゴイ製貝 12: ショウゴイ製貝 13: ショウゴイ製ナイフ 14: ショウゴイ製ナイフ 15: ショウゴイ製ナイフ

18〜24: 貝製釣針 (18・24: 単式、19・20: 複式、21: 複式、22: 複式、23: 複式、24: 複式) 25〜32: 貝製釣針 (25: 複式、26: 複式、27: 複式、28: 複式、29: 複式、30: 複式、31: 複式、32: 複式) 33〜37: ショウゴイ製針類 (33: ショウゴイ製針、34: ショウゴイ製針、35: ショウゴイ製針、36: ショウゴイ製針、37: ショウゴイ製針) 38〜41: ショウゴイ製針類 (38: ショウゴイ製針、39: ショウゴイ製針、40: ショウゴイ製針、41: ショウゴイ製針) 42〜45: ショウゴイ製針類 (42: ショウゴイ製針、43: ショウゴイ製針、44: ショウゴイ製針、45: ショウゴイ製針) 46: ショウゴイ製針類 (46: ショウゴイ製針) 47〜51: ショウゴイ製針類 (47: ショウゴイ製針、48: ショウゴイ製針、49: ショウゴイ製針、50: ショウゴイ製針、51: ショウゴイ製針) 52〜56: ショウゴイ製針類 (52: ショウゴイ製針、53: ショウゴイ製針、54: ショウゴイ製針、55: ショウゴイ製針、56: ショウゴイ製針) 57〜66: ショウゴイ製針類 (57: ショウゴイ製針、58: ショウゴイ製針、59: ショウゴイ製針、60: ショウゴイ製針、61: ショウゴイ製針、62: ショウゴイ製針、63: ショウゴイ製針、64: ショウゴイ製針、65: ショウゴイ製針、66: ショウゴイ製針)

図4 貝製品の分類図 (文献⑩より)

4. 研究成果

(1) マリアナ諸島における貝製品出土遺跡の集成

マリアナ諸島における貝製品出土遺跡について、グアム島 22 遺跡、ロタ島 3 遺跡、サイパン島 9 遺跡、アルマガン島 1 遺跡、パガン島 1 遺跡の計 39 遺跡を集成し、分析した。

(2) 貝製品の画期

各貝製品の時期的傾向をまとめたところ、貝製品組成を以下のように 2 つの段階に明確に区別することができた(図 6)。

第 1 段階: () 期

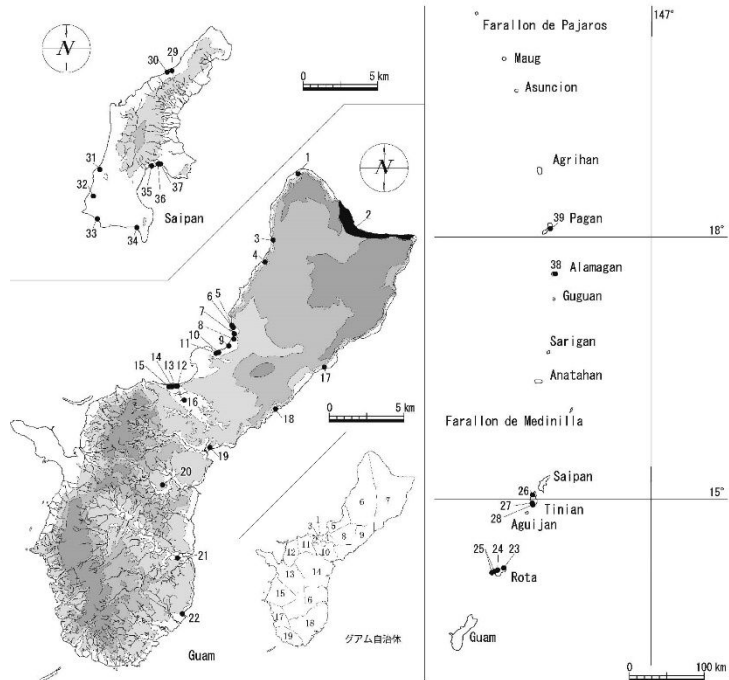
シャコガイ科製貝斧・貝鑿の蝶番部利用型と全面研磨型、トウカムリ製貝斧、リュウキュウサルボウ製貝斧、貝製 J 字形単式釣針の造り出し型、イモガイ科製ビーズ類、タカラガイ科製ビーズ、イモガイ科製ディスク、真珠貝類製垂飾、各種貝製リング

第 2 段階: () 期

シャコガイ科製貝斧・貝鑿の腹縁部利用型の増加、タケノコガイ科・フデガイ科製貝斧・貝鑿の殻底研磨型、スイジガイ製貝鑿、真珠貝類製ナイフ、貝製単式釣針刻み型類、ゴージ、組合せ式釣針、回転穿孔の施された巻貝製石灰入れ容器、イモガイ科製ビーズ類、ウミギク科製ビーズ、ウミギク科製ディスク、シャコガイ科製三日月状貝製品、双円錐状貝製品、ウミギク科製垂飾

(3) 貝製品の画期の背景

第 1 段階は約 3500 年前に入植してきた人々と直接的に関係していると考えられる。先行研究では言語学的見地やマリアナ赤色土器の器形や文様との類似性により、フィリピンからマリアナ諸島への入植が考えられており、フィリピン北部のカガヤンバレーの土器との直接の関係性が想定されるようになってきた(文献)。しかし、最新の土器研究や航海シミュレーション分析からはフィリピン北部を起源とする説に否定的見解が提示されている(文献)。フィリピン北部の貝製品との詳細な分析はこれからの課題だが、第 1 段階のような貝製品組成を当該地域に見出すことは現段階では困難といわざるをえない。第 2 段階への変化はラッテストーンに関連する第 2 の人類移動と関



グアム自治体 1: Hagana 2: Iapanta Heights 3: Sinajana 4: Mengqoaq-Ito-Waita 5: Tamuning 6: Dededo 7: Yigo 8: Barrigada 9: Mangilao 10: Chalan Pago-Ordot 11: Asan 12: Piti 13: Santa Rita 14: Yona 15: Agat 16: Taloogo 17: Umatac 18: Linaresjan 19: Merizo

- 1 リティディアン遺跡 2 タラギビーチ遺跡 3 プガポイント遺跡 4 ハプト遺跡 5 ガンビーチ遺跡 6 ファファイビーチ遺跡 7 ナトンビーチ遺跡 8 タモンベイ遺跡 9 タシ遺跡 10 タモンベイ遺跡 11 イバオ遺跡 12 サンアントニオ遺跡 13 ハガツヤブリッジ遺跡 14 アガット遺跡 15 ハガツヤ遺跡 16 シガチャン遺跡 17 パガット遺跡 18 マンギラオ遺跡 19 オルドバゴ遺跡 20 マネンゴン遺跡 21 タロフォオリバー遺跡 22 ノンマベイ遺跡 23 モーチョン遺跡 24 ウウラン遺跡 25 ロタ島遺跡 (ボルジャ・ソンソ・マラチャ・タイマ) 26 ウナイチュル遺跡 27 タガ遺跡 28 ブルー遺跡 29 サンロケ遺跡 30 アチュガオ遺跡 31 ススベ遺跡 32 チャランピアオ遺跡 33 アギガン遺跡 34 オブジャン遺跡 35 ラウウハウス A 遺跡 36 ウナイバット遺跡 37 パボット 1 遺跡 38 アラマガン島遺跡 39 レグサラッテ遺跡

図 5 マリアナ諸島の貝製品出土遺跡分布図(文献⑩より)

時期	実用品										装飾品							
	貝斧・貝鑿		ナイフ	スクレーパー	単式釣針	組合せ式釣針	石製入孔容緒	ビーズ		ディスク	垂飾	リング						
I 期	シャコガイ科	タケノコガイ科	トウカムリ	リュウキュウサルボウ	タカラガイ科	J 字	イモガイ科	ウミギク科	イモガイ科	ウミギク科	ウミギク科	ウミギク科	ウミギク科	ウミギク科	ウミギク科	ウミギク科	ウミギク科	ウミギク科
II 期	タケノコガイ科	フデガイ科	タケノコガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科
III 期	タケノコガイ科	フデガイ科	タケノコガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科
IV 期	タケノコガイ科	フデガイ科	タケノコガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科
V 期 (明証)	タケノコガイ科	フデガイ科	タケノコガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科	フデガイ科

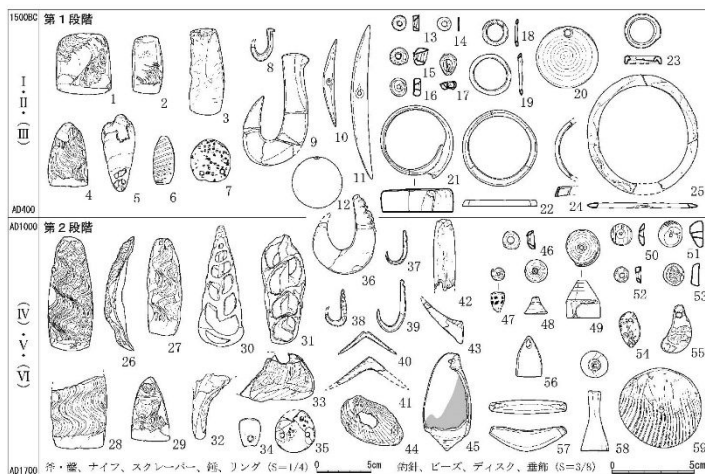


図 6 マリアナ諸島における貝製品の消長と変遷図(文献⑩より)

係していると思われる。第2段階にはラッテストーン上屋構造やカヌー製作などの木工産業の拡充、内湾や外洋漁業の盛行、檳榔噛みの一般化など日常生活や日々の生業、慣習について前時期までの伝統を引き継ぎながらも、いくつかの変化があったと推察できる。また、装飾品の変化はさらに著しく、外部からの集団の移動や、貝素材を媒介とする交易などを想定しておく必要がある。

本科研の研究成果の詳細を研究成果報告書(文献)にまとめた。本研究の分析を基礎として、今後はミクロネシアの各地域やフィリピン、東南アジア島嶼部などと貝製品組成との比較作業を進めていく。

引用文献

Spoehr, A. *Marianas Prehistory: Archaeological Survey and Excavations on Saipan, Tinian and Rota*. Fieldiana: Anthropology 48. 1957, Chicago Natural History Museum, Chicago.

Takayama, J and M. Intoh. *Archaeological Excavation of Latte Site M-13, Rota in the Marianas*. 1976, Report of Pacific archaeological Survey No. 6. Tokai University, Tokyo.

Hung, H. C. *Migration and Cultural Interaction in Southern Coastal China, Taiwan and the Northern Philippines, 3000 BC to AD 100: The Early History of the Austronesian-speaking Populations*. 2008, Unpublished doctoral dissertation, The Australian National University, Canberra.

Carson, M. T. *Archaeological Landscape Evolution: the Mariana Islands in the Asia-Pacific region*. 2016, Springer Nature.

山野ケン陽次郎・片岡修・Richard K. Olmo 「グアム島ハプト遺跡出土貝製品からみたラッテストーン周辺における諸活動と空間利用」『動物考古学』30, 2013, 309 - 328 動物考古学研究会 .

Moore, D. R. *Measuring change in Marianas pottery: the sequence of pottery production at Tarague, Guam*. Unpublished master's thesis. 1983, University of Guam, Mangilao.

Carson, M. T., H. Hung, G. Summerhayes and P. Bellwood. The Pottery Trail from Southeast Asia to Remote Oceania. 2013, *Journal of Island & Coastal Archaeology* 8: 17-36.

Kelly, M. C. S., and O. Winter. Complexities in the Origins of Pottery in the Marianas: A comparison of Pottery Assemblages from the Northern Philippines and the Mariana Islands. 2020, *Quaternary International*: 1-20.

(www.elsevier.com/locate/quaint.)

Fitzpatrick, S. M. and R. T. Callaghan. Estimating Trajectories of Colonisation to the Mariana Island, Western Pacific. 2013, *Antiquity*, 87: 840-853.

- ⑩ 山野ケン陽次郎編 『先史マリアナ諸島の貝製品の研究』2017～2021年度日本学術振興会科学研究費(若手研究(B))課題番号17K13565「先史時代におけるマリアナ諸島の貝類利用の考古学的研究」2022, 熊本大学埋蔵文化財調査センター .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山野ケン陽次郎	4. 巻 51
2. 論文標題 ミクロネシアの貝製民具	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 民具マンスリー	6. 最初と最後の頁 28-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山野ケン陽次郎	4. 巻
2. 論文標題 先史時代におけるマリアナ諸島の貝製品	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 先史学・考古学論究	6. 最初と最後の頁 419-433
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山野ケン陽次郎
2. 発表標題 先史時代における太平洋西部島嶼地域の貝類利用の実態解明
3. 学会等名 ヤポネシアゲノム若手研究集会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山野ケン陽次郎
2. 発表標題 ミクロネシアの考古学
3. 学会等名 沖縄県立博物館 第520回文化講座（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 山野ケン陽次郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 熊本大学埋蔵文化財調査センター	5. 総ページ数 128
3. 書名 先史マリアナ諸島における貝製品の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	片岡 修 (Kataoka Osamu)	上智大学・非常勤講師 (32621)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------